

第三十一回 七たび孟獲を擒う、中原を伐たんとして武侯表を上る

—— 出師の表 ——

(前回から今回まで)

諸葛亮は、南蛮王孟獲と戦つて彼を捕らえますが、すぐに解き放ちます。捕らえたのになぜ逃がすのかと聞かれた諸葛亮は、彼の心を掴むことが平定するということだ、と答えます。

前に南蛮討伐は一種異様な世界とりましたが、『三国志演義』では、南蛮の人々は奇矯な風体で、象にまたがり虎や豹を操り、蛇を食べる蛮族として描かれます。

人物の名前も、鄂煥(がくかん)、金環三結(きんかんさんけつ)・董荼那(とうとな)・阿会喃(あかいなん)・忙牙長(ぼうがちょう)・朶思大王(だしだいおう)・帶來洞主(たいらいどうしゅ)・祝融夫人(しゅくゆうふじん)・木鹿大王(ぼくろくだいおう)・兀突骨(ごつとつこつ)など、風変わりな名前が続きます。

そのいでたちはと見れば、青い目に黒い顔、髪は黄色くヒゲは紫色で、金の耳輪を付け、ザンバラ髪に裸足の兵士。また、戦場でも異様な障害に出くわします。例えば、渡ると口や

鼻から血を流して死んでしまふ川、また四つの泉が登場して、一つ目は飲むと口がきけなくなつて死に、二つ目は浴びると皮や肉がただれて死に、三つ目は体にかけると手足が黒くなつて死に、四つ目は飲むと体がクニヤクニヤになつて死ぬ、というハチャメチャな空想譚の世界です。

一方、これに対する諸葛亮のいでたちはと見れば、頭に綸巾りんきん（青い糸で作つた隠者の頭巾）、身には鶴氅かくしやう（鶴の羽で作つた上衣）、手には羽扇うせんを持ち、四頭立ての馬車に乗り、左右を諸將に取り囲まれるという、こちらもどこか現実離れた格好です。ですから。この名場面は読んでいても、どこか現実感が伝わってきません。

さて、孟獲は二回目も簡単に捕まります。しかしその時も、もう一回捕まったら次は降伏すると言つて解放されます。同様に、三回、四回、五回、六回と続き、いよいよ七回目になります。

（本文抄）

（孟獲が）逃げている最中、山のかげから一手の軍勢が一台の車を取り囲んで現れた。車中には一人の人物が端座している。綸巾に羽扇とうほう、道袍どうほうを身につけたその人は、これぞ諸葛亮

である。諸葛亮は大声で怒鳴りつけた。

「逆賊孟獲め、今度はどうだ」

孟獲が慌てて馬首を返して逃げ出そうとすると、横から一人の大將が躍りでて、行く手をさえぎった。これぞ馬岱ばたいである。孟獲はあわてふためき、馬岱に生け捕りにされてしまった。このとき、王平と張翼はすでに一手の軍勢を率いて、南蛮の本陣に馳せ入り、祝融夫人しゅうくゆうふじんおよび一族の老若ろうにやくを問わずすべてを生け捕りにしていた。

(中略)

諸葛亮は孟獲を連れて来るように命じ、孟獲が地面に跪ひざまづくと、その縄を解かせ、ひとまず別の陣幕で酒食を与えるように命じてから、諸葛亮は酒宴しゅえん係の役人を呼びつけて、かくかくしかじかのようにせよと申しつけた。

さて、孟獲が祝融夫人および孟優・帶來洞主たいらいどうしゅら一族郎党とともに、別の陣幕で酒を飲んでみると、突然、一人の者が入って来て、孟獲に言うことには、

「丞相には策を弄ろうしたことを氣恥きはずかしく思われ、貴公とお目にかかりたくないとのこと。そこで貴公を放して帰ってもらい、もう一度軍勢を集めて勝負をつけに来るようにとのことです」

孟獲は涙を流しながら、「七擒七縱しちきんしちじょう（七たび生け捕りにし七たび釈放すること）は古今未曾有のことです。私は教化の外にいる者ですが、少しは礼義を知っております。そんなふうにしていただいては、恥ずかしくて居たたまれません」と言い、兄弟や妻子をはじめ一族郎党とともに、地面にひれ伏し肌脱はだぬぎになつて、「丞相の大いなる威光を目の当たりにし、南蛮の者は二度と謀反はおこしません」と謝罪した。

諸葛亮が「では、心から降伏したというのか」と聞くと、孟獲は涙ながらに、「子々孫々ししそんそんにいたるまで、みな命を助けていただいたご恩を忘れません。心から降伏しないわけがありません」と詫わびた。

そこで諸葛亮は孟獲をみずからの陣幕に招いて、祝賀の宴を開き、彼を末ながく洞主の地位につかせ、蜀軍が奪い取った土地はことごとく返してやったので、孟獲の一族郎党および蛮兵たちは諸葛亮に感謝して、嬉々として帰って行つた。

（解説）

こうして南蛮夷なんばんいは平定されますが、彼らはふだんは山奥に暮らす、中国の漢人とは何の関係もない少数民族です。一旦は武力で屈服させても、諸葛亮が帰還すれば再び叛そむく可能性が

ありました。諸葛亮は、「心から降伏させてこそ、しぜんと平定する」と言って、孟獲がすべてにわたってかなわないと敬服するまで、辛抱強く待ち続けたのです。諸葛亮の南征は、彼らの心服を勝ちとるものでなければならなかったのです。「七擒七縱」はそのためだったのです。諸葛亮の人間に対する洞察とうさつから出た行動でした。南蛮平定後、諸葛亮は孟獲らの地位を今まで通り認め、間接統治かんせつとうちのかたちで南中なんちゆうを治めることにします。

さて、渡邊義浩氏は、諸葛亮の南征について次のように指摘されています。

「諸葛亮は南征により、『西南シルクロード』を開拓しました。西南シルクロードとは、中国の成都から雲南・インドシナ半島の北部・インドを通って中央アジアに至る東西交易路です。諸葛亮は、それにより最も必要な塩と鉄を確保したほか、梔子（くちなし）や椒（はじかみ・山椒）といった植物や水銀・銅・鉄などの鉱物や竹・木でつくった民芸品や牛馬や奴隷を重要な交易品として扱いました」（『こんなに面白かった三国志』、大和書房）、と指摘されています。南中は、蜀に富をもたらす源泉となったのです。

諸葛亮は南征が終わると、次いで北伐を敢行します。

北伐の目標は魏の打倒ですが、諸葛亮は第一次北伐で、魏延ぎえんの直接長安ちやうあんを奇襲する提案をしりぞけ、はるか西の街亭がいていの攻略を馬謖ばしやくに命じます。当時このあたりは森林に囲まれ、街亭

は中国内地から西方へ通じる通路にあたっています。魏がこの地を抑えていました。

東と西を結ぶ通路といえ「シルクロード」です。戦乱の三国時代は、その前後の漢や唐の全盛時代に比べると交易も細々としていたでしょうが、交易が行われていたことは間違いないりません。魏と西方との通路を断ち切り、その地を蜀が抑えることができれば、西南シルクロードと北のいわゆるオアシス・ルートをつなぐ、蜀を中心とした交易円環圏ができあがるのです。諸葛亮には、そんな雄大な構想があったのではないのでしょうか。

西南シルクロードの確保で、蜀は豊かになったと『三国志』は書いています（諸葛亮伝）。ましてや、これに北方シルクロードを結び合わせることができれば、蜀の国力は飛躍的に増大します。

こうした思いが諸葛亮にあったとしても不思議ではありません。私は若いころ諸葛亮の第一次北伐をみて、魏を討つといいながらなぜこんな西に行くんだろう、とずっと疑問に思っていました。しかし、こう考えるようになって納得することができました。

魏に目を転じると、魏の曹丕が即位七年目にして亡くなります。曹真、曹休、陳羣、司馬懿に後継ぎ曹叡（明帝）の輔佐を託します。ときに黄武四年（二二四）、四十歳。文帝と諡さ

れます。

諸葛亮はこれを聞くと、才智のある司馬懿が蜀の禍わざわいになることを警戒し、彼を除く策をめぐらします。そして、司馬懿が謀反を計画していると噂をたて、皇帝となった曹叅そうえいと司馬懿の仲を裂こうとします。司馬懿は対蜀の押さえである雍州・涼州に駐屯していましたが、この策は功を奏し、司馬懿は罷免ひめんされてしまいます。そして、司馬懿に代わって、曹休が雍州・涼州の総司令官に任命されます。

ここから、『三国志演義』の終盤部を彩る、諸葛亮と司馬懿の虚々実々の駆け引きが繰り広げられます。

『三国志演義』は曹操の「奸絶かんぜつ」、関羽の「義絶ぎぜつ」、諸葛亮の「智絶ちぜつ」を描いたといわれますが、曹操、関羽はすでに亡くなり、諸葛亮の「智絶」だけが残ります。そして、終盤で諸葛亮の「智」の相手役が司馬懿になります。

諸葛亮は、「臣亮りやう、申す」で始まる「出師の表すいし」を劉禪に捧げ、魏と雌雄しゆうを決する北伐に討つてです。

(本文抄)

後主劉禪りゆうぜんが朝廷にでたとき、諸葛亮は進み出て「出師の表」を奉った。

その文章は以下のとおり。

「臣しん（諸葛）亮りやう、申す。先帝（劉備）、漢室再興の大業を興したまいしが、中道にして崩殂ほうそされ、今、天下三分して、益州（蜀）疲弊す。これ誠に危急存亡の秋なり。

しかれども、侍衛の臣、朝廷にありて忠勤に励み、忠義の士、身を忘れて辺疆の地に勇戦するは、蓋し先帝の殊遇を追いて、これを陛下に報いんと欲すればなり。

陛下、よく忠言を容れ、以て先帝の遺徳を光やかし、志士の氣を大ならしむべく、妄りに自らを軽んじて、非義の喩えを引き、以て忠諫の路を塞ぐことあるべからざるなり。

宮中・府中は俱に一体となり、善を賞し悪を罰するに、異同あるべからず。若し姦悪を働かつかくき罪科を犯し、あるいは忠を尽くし善を為す者あらば、有司に付してその賞罰を論じ、以て陛下の公平明白なる政道を示すべく、私心を差し挟みて、宮中・府中にて法を異にすべからず。

（中略）

賢臣けんしんに親しみ、小人を遠ざけるは、これ前漢の興隆せし所以なり。小人に親しみ、賢臣を遠ざけるは、これ後漢の衰微せし所以なり。先帝、在世の時、つねに臣とこの事を論じ、桓・

靈の二帝に及びて、嘆息せざるることなかりし。

侍中・尚書・長史・參軍は、みな忠貞にして節義に死する臣なり。願わくは陛下、これに親任されんことを。さすれば則ち、漢室の隆なること、日をもつて待つべきなり。

臣はもと卑賤の身にして、躬ら南陽に耕す。命を乱世に全うせんことを願ひ、榮達せんと諸侯に仕うることを求めず。先帝、臣の卑鄙なるを顧みず、かたじけなくも自ら枉屈し、三たび草廬に顧みられ、臣に諮るに漢室復興の大事を以てされる。これに由りて臣はその意氣に感激し、遂に先帝のために奔走せんと誓えり。

後に先帝の敗北に値ひ、任を敗軍の中に受け、命を危難の間に奉じて奔走す。爾來、二十有一年なり。先帝は臣の謹慎なるを知り、崩御にあたり臣に大事を託さる。臣、命を受けてより朝夕心をくだき、親任に背きて以て先帝の明を傷なわんことを恐る。故に五月瀘水を渡り、深く不毛の地に入る。今、南方すでに平定され、兵甲すでに足る。まさに三軍を率いて、北のかた中原を定むべし。臣の非力をつくし、姦凶（魏）を除き、漢室を再興して旧都に還さんことを願う。これ臣の先帝に報いて、陛下に忠をいたす務めなり。

この本文抄は、『三国志演義』の「出師の表」を書き下し風の訳に改めたものです。その主意は以下の通りです。

蜀は疲弊しきつて危急存亡の時との書き出しではじまり、続いて、若い劉禪りゅうぜんに対して、忠言に耳を傾け、宮中（皇帝の側近）と府中（政府官僚）が一体となり、賢臣けんしんを近づけて小人を遠ざけることを心がけよ、と帝王としての道を説きます。そしてその後、劉備りゅうべいの負託に答えんとする自らの思いを述べます。

「私は、はじめ世間から目立たぬよう暮らし、一生を終えようとはしましたが、先帝はそんな私をみずから三度も訪問してくださり、今の乱世をおさめる方途をお尋ねになりました。私は先帝の真心に感激し、先帝のために奔走しようと決意しました。そして、先帝の命を奉じて二十一年、先帝はご崩御ほうごにあたり、私に漢室の復興を託されました。それ以来、私は日夜憂慮し、功績をあげることのないまま、先帝の負託ふたくにそむくのではないかと、恐れてまいりました」

そして今、南方を平定して戦いの準備が整いました。今こそ創業の理想に立ち返り魏と戦うべきときです、との決意を述べます。

「陛下（劉禪）は先帝の遺詔いじょうを常に思い起こしてください。私は先帝の大恩を思うと感激に堪

えません。今、出征するにあたり、涙があふれ申し上げる言葉をしりません」と最後を赤誠せきせいの言葉で締めくくります。

劉禪には父劉備のような才能はありませんでしたが、父の遺言を守り諸葛亮を父のごとく信頼します。諸葛亮も未熟な劉禪を立派に育てようと心を尽くしつつ、劉備から託された大業達成たいぎょうたっせいのため北伐に出発します。

劉備の負託ふたくに文字通り命をかける真情が、古来多くの人々を心をうちました。悲痛なまでの覚悟が「出師の表」の行間に脈打っています。このとき、諸葛亮は四十七歳。「三顧の礼」から二十年、そのときの劉備と同じ年齢です。

諸葛亮の北伐にあたり、劉禪は、度重なる心労が諸葛亮の身体を蝕むしばむのではないかと心配します。また、天文観察に詳しい譙周も、天文を見るに今は北伐の時期ではないと反対します。

譙周は地元益州出身の人で、『三国志』にはこの時反対した事実はありません。しかし、諸葛亮の死後、「仇国論きゅうこくろん」を書いて度重なる遠征に民衆は疲れ切っていると、打ち続く北伐に反対しています。また、のち蜀の滅亡に際し、南へ逃げようとする劉禪に降伏を説き、劉禪はその進言に従って魏に降伏しています。

このような史実から、『三国志演義』はこの場面、譙周が諸葛亮の北伐に異を唱えたことにしています。

前出の、劉禪に代わって君（諸葛亮）がとれといった劉備の命を「乱命」とした王夫子は、譙周を「姦佞売国の譙周」と口をきわめて罵（ののし）っています（『読通鑑論』）。後世、朱子学の立場から見ると、魏への降伏を薦めた譙周は貶（おとし）められて当然なのでしょう。

しかし、中原回復を生涯の目標とした諸葛亮は、ここまで、蜀の産業を興し、国内体制を整備し、南方の資源を獲得して、万端の準備を整えてきました。しかも、諸葛亮の年齢は五十歳に近づこうとしています。今自分の生きているこの時を失えば、二度と機会はないと見通していたのでしょうか。

さて、諸葛亮はこの時、すでに老境（らうきやう）に入った趙雲（ちやううん）を北伐軍の編成（へんせい）から外（はず）しました。すでに五虎將軍で残っているのは、趙雲一人でした。老いておそらく髪も白くなっていたでしょう。ところが趙雲はそれを知るや、どうして自分の名がないのかと諸葛亮に詰め寄り、先鋒となることを認めさせます。趙雲の氣概（きがい）が浮き彫りにされる場面です。こうして諸葛亮は、趙雲を先鋒に任じ、漢中へ進撃を開始します。

趙雲は向かうところ敵なし、鎗（やり）を手に敵を蹴散（けち）らす様は無人の境を行くようでした。魏軍

はさんさんに敗れ、魏の総大将の夏侯楙かこうぼうは南安なんあんの城に逃げ込みます。南安の西は天水郡てんすい、北は安定郡あんていへとつづきます。蜀軍は安定を陥し入れると、さらに南安を攻めて夏侯楙を生け捕りにし、ついで天水郡に向かいます。ここで、姜維きやういが天水郡の長官馬遵ばじゆんの将として登場します。

(本文抄)

さて、趙雲は五千の軍勢を率いて、天水郡の城壁の下へ駆け寄せると、声を張り上げて言った。

「われこそは常山の趙子龍ちやうしりゆう（趙雲の字）だ。おまえたちはわれらの計略にかかったのだから、さつさと城をあげ渡せ。そうすれば命はたすけてやるぞ」

城壁の上りやうちよにいた梁緒りやうじよはからからと笑いながら言った。

「おまえこそ姜伯約きやうはくやく（姜維の字）の計略にはまったことに、まだ気がつかないのか」

趙雲が城攻めにかかろうとした時、ふいに鬨とぎの聲があたりを震ふるわせ、四方から天を衝つかんだばかりの炎があがった。先頭の若々しい将軍が鎗をかまえ、馬を飛ばして攻め寄せながら言った。

「おまえは天水の姜伯約を知らないのか」

趙雲は鎗をかまえ、まっすぐ姜維に攻めかかった。数合すうごう交わすうち、姜維の鎗先はますます鋭くなってきたので、趙雲は仰天し、ひそかに「ここにこんな人物がいようとは思ってもよらなかつた」と感嘆かたんした。

両者が戦っている最中、二手の軍勢が挟み撃ちをかけて来た。馬遵ばじゆんと梁虔りょうけんが軍勢を率いてもどつて来たのである。

趙雲は挟み撃ちにあつてこらえきれず、血路けつろを開いて脱出し、敗軍を率いて逃げ出したものの、姜維が追いかけて来る。幸い、張翼ちやうよくと高翔こうしやうの二手の軍勢が出撃し加勢してくれたおかげで、帰途につくことができた。

趙雲は本陣に帰着すると諸葛亮に会い、敵の計略にかかったことを説明した。諸葛亮は驚いてたずねた。

「私の妙計みょうけいを見破るとは、それは何者だ。」

南安出身の者がおり、「その人は姓は姜、名は維、あざなを伯約といい、天水郡冀州きけんの出身です。母には孝養を尽くし、文武両道ぶんぶりやうどう、智勇兼備ちゆうけんびの当代の英雄です」と言い、趙雲も姜維の鎗の使い方を褒めたたえ、余人の及ばない腕前うでまへだと言う。

(中略)

さて、諸葛亮は姜維を警戒して、みずから先鋒となり、天水郡めざして進撃を開始した。城壁の側まで来ると、諸葛亮は命令を出して、

「およそ城攻めは到着した日に、三軍を激励し、太鼓や銅鑼どらを打ち鳴らしながら、一気に攻め込むものだ。ぐずぐず日延べひのをすれば、士気が落ちてしまい、急には攻め落とせなくなるだろう」

と、大軍勢がただちに城壁の下に押し寄せると、城壁の上には旗さし物が整然と立ち並び、とても軽々しく攻め込めそうにない。

夜中になると、突然、四方から天を焦こがす炎があがり、関の声が地をどよもしたが、いったいどこから軍勢が攻め寄せて来るのかわからない。すると、城壁の上でも太鼓の音や関の声があがり、これと呼応したため、蜀の軍勢は先を争って逃げ出した。諸葛亮は急いで馬に乗り、関興・張苞かんこう ちやうほうの二将にしょうが守って、幾重いくえもの包围たいまつを突破した。

ふりかえって見ると、真東の方向に松明たいまつを持った騎馬の軍が現れ、長蛇ちやうだのような勢いで進んで来る。諸葛亮が関興かんこうに偵察ていさつに行かせたところ、もどって来た関興は「あれは姜維の軍勢です」と報告した。諸葛亮はため息をつきながら言った。

「それほど軍勢の数は多くはないが、それにしても見事な采配さいはいぶりだ。彼こそ、まことの將軍というものだ」

(解説)

天水を守った姜維は、趙雲と一騎討ちで互角の勝負をし、また諸葛亮の計略を逆手さかてにとつて蜀軍を追い込みます。諸葛亮は、姜維の才能に感嘆します。そして、姜維を我が陣營に迎えようと策をめぐらします。

まず、魏延ぎえんに命じて姜維の母がいる冀州きけんを攻撃させ、親孝行な姜維をおびき出します。それから、軍需物資の置かれていた上邽じょうがいを、趙雲に攻撃させます。姜維が冀州きけんに到着すると、魏延は負けたふりをして逃げ出し、わざと姜維を入城させます。

一方で諸葛亮は、すでに捕らえていた夏侯楙かこうぼうに命を助けてやるから、姜維を説得して降伏させるように言っています。

夏侯楙は承諾して冀州へ出発しますが、途中、冀州から逃げてくる住民に出会います。夏侯楙は彼らから、姜維がすでに降伏したとの偽の情報を知らされます。夏侯楙はこれを信じて冀州には向かわず、そのまま天水郡に行つて、太守の馬遵に、姜維が裏切つて降伏したと

の誤った情報を伝えます。

その夜、偽物の姜維が蜀軍の先頭に立って、天水郡に攻め寄せます。しかし夜なので、姜維が偽物だとはわかりません。こうして、馬遵に姜維が裏切ったと信じ込ませます。

一方、本物の姜維は、冀州に入城したものの持ちこたえることができず、出撃して血路を開き天水郡に向かいます。しかし、姜維が裏切ったと思ひ込んだ馬遵は、矢を乱射してきます。驚いた姜維はそのまま上邽へ向かいますが、ここでも、姜維を見ると一斉に攻撃してきます。こうして、すべてが諸葛亮の計略通りに進んでいきます。

(本文抄)

そこへ、山から一輛いちりょうの小さな車が現れた。車のなかの人物は、頭に綸巾りんきんを載せ、身に鶴氅かくしやうをつけ、手に羽扇うせんを揺らしている。これぞ諸葛亮である。

諸葛亮は姜維に呼びかけて言った。

「伯約どの、これでも降伏しないのか」

姜維はしばらく考え込んだが、前には諸葛亮、うしろには関興かんこうがいるうえ、ほかに逃げ道もないため、やむなく馬から下りて降伏した。諸葛亮は車から走り出て、姜維の手をとって

言った。

「私は茅廬ぼうろ（茅葺かやぶきの草庵）を出てこのかた、あまねく賢者を捜し求め、日ごろ学んだところを伝えたいと思つて来たが、これまでそのような人物に出会えずにいた。今、伯約どのと出会い、ようやく私の願いはかなえられた」

姜維は大いに喜び、平伏して感謝した。かくして諸葛亮は姜維とともに本陣にもどり、天水・上邽を攻め取る計略について話し合った。

（解説）

この後、諸葛亮は、姜維の献策を入れて天水郡・冀県・上邽を手に入れます。そして『三国志演義』は「その威名は天下に鳴り響き、遠近の州や郡は蜀軍の姿を見ただけで降伏した」と記します。

第一次北伐は、このように順調に進んでいきます。また、諸葛亮は、後継の人材である姜維を手中にしたのです。以下、歴史書の『三国志』から少し補足します。

姜維は代々「天水の四姓しせい」と呼ばれる大豪族の出身です。二二八年、諸葛亮の北伐軍が近づくと、天水太守の馬遵ばじゆんは、姜維の内通ないつうを疑つて上邽に逃亡します。姜維は馬遵の後を追つ

て上邽へ行きますが、馬遵は城内に入することを許しません。このため、やむなく冀州に戻りますが、そこでも入れてもらえず、姜維は行き場を失って蜀に降伏します。

諸葛亮は姜維を高く評価し、「与えられた仕事を忠実に勤め、思慮精密しりよせいみつであり、涼州りようしゅうで最高の人物だろう」と言い、また「軍事にはなはだ敏達びんたつし、度胸もあるうえ、兵士の気持ち

を深く理解している」と述べています（『三国志』姜維伝）。そして、諸葛亮の死後は、彼が蜀の軍事指導者となり北伐を継続することになります。